

第7回 建築祭を終えて

荒井 洋



建築祭 文化講演会



建築祭 卒業設計コンクール審査



地域材フィールドワークin東信



地域材フィールドワークin東信

長野県クラブの最大イベント「第7回 建築祭」が無事終了しました。事業委員会の皆様、周到な準備ありがとうございました。また当日は多数の会員の皆様の協力を頂きありがとうございました。

今年も松本市との共同企画「見つめようくらしの場 ひと、まち、建築」の一環として、2月10日に伊東豊雄氏の「くらしの空間セミナー」、23日に京都造形芸術大学教授 横内敏人氏の「第21回文化講演会」、24日に「第22回長野県学生卒業設計コンクール」が開催されました。今年は会員作品展を止め新企画として松本市内の高校生を対象とした、卒業設計コンクールを見学する「ギャラリーツアー」も開催されました。

「講演会」はどちらも超満員の大盛況で建築に興味を持つ一般市民が増えたことが一因だと考えられます。講師の顔ぶれから「世界」と「日本」の対決となるのではと密かに期待していたのですが、どちらも日本の伝統建築に今後の建築のあり方を見いだすべきとの結論に終わり、まるで違う方向を目指していたと思われるお二人が同じ結論に達するという大変興味深い結果となりました。「卒業設計コンクール」は大学、専門学校、高校共にレベルが上がっており、特に高校生のレベルが飛躍的に向上していることに驚かされました。問題意識は勿論のこと、そこに夢まで乗せて作品に仕上げているのです。この優秀な学生達を公共機関やハウスメーカーばかりに就職させてしまうのではなく、我々の事務所が受け入れ先とならなければなりません。

川上新会長が「グローバルからグローカルへ」と度々おっしゃいます。「量から質へ」とも。それは地方の建築家だからこそ出来ることを考えろと言われているのだと私は捉えています。県産材を使うというのもその一つで

しょう。しかしながら使うと言うのであればハウスメーカーでも出来ます。しかも激しく価切って。それでは活用したとは言えません。質の向上を伴うこと、つまり文化として根付かせるところまで高めて初めて建築家の仕事と言えるのではないですか。伊東豊雄氏が言っていたように、東京に目を向け同業者に人気のある白くてつるつるした家ばかり追いかけるのを止め、環境に配慮した信州スタイルの建築を造り信州から大きな声で発信し続けることが今後重要になっていくと考えます。まず個人の質を高め大いに他との差別化を図りましょう。そして個人の個性を越えて集団でなければ叶えられない限りを全国に向かって発信しましょう。横内敏人氏が言っていました。「長野県クラブは活発で良い。まるでサロンのようで羨ましい。」と。まだまだ捨てたものではありません。信州人らしいねちっこい議論好きを大いに発揮して、新しい建築文化を築きましょう。

最後に伊東氏が懇親会の席で言っていた「脱近代建築の5原則」の完全版を書いて終わりにします。皆さんの大いなる力を祈っています。

伊東豊雄の「脱近代建築の5原則」

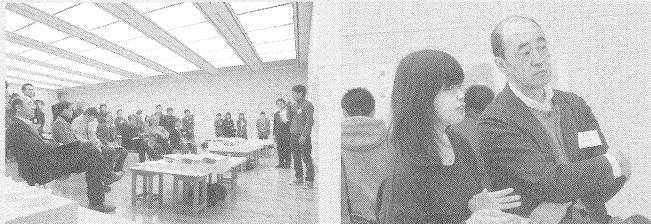
1. 自然に溶け込む屋根の復活
2. 内外の曖昧な境界
3. 自然素材の利用
4. 自然エネルギーの活用
5. 場所の流れを生み出す内部(機能に縛られない内部)



建築祭が開催されました！

『第7回建築祭』が松本美術館にて2月23日(土)、24日(日)に開催されました。建築家・横内敏人氏による「文化講演会」、県内の大学生・専門学校生・高校生による「長野県学生卒業設計コンクール」を中心に催されました。更に例年行われていた会員作品展に変えて、今回初の試みとして

「ギャラリーツアー：建築について知ろう！」をテーマに、高校生以上の方を対象にJIA長野県クラブ会員がコンクール会場を案内しました。会員はじめ、多くの一般市民の方々にも参加いただき大盛況の建築祭となりました。

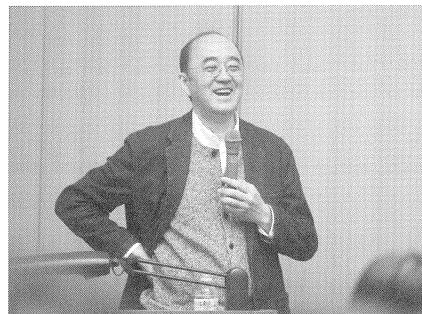


横内 敏人先生を文化講演会にお迎えして

武田 誠彦

JIA長野県クラブ7回目の建築祭は第22回学生コンクール審査委員長である横内敏人先生をお迎えし文化講演会が行われました。講演会は横内先生ご自身の経歴の紹介から始まり、日本文化・自然、建築への考え方・捉え方、設計思想、実際の計画や設計の進め方などのお話を経て、近作を中心された作品のお話を聞きしました。印象的だったのは『和』という言葉についてでした。『和』という言葉は、1.日本国・日本的なもの、2.和やか・平和、3.足し算の結果・総和といった3つの意味があり、『和』という本質は外來の文化を排除することなく取り入れ、既存文化を捨ててしまうのではなく足し合わせて和やかにしていく、新しい秩序を再構築していく、それが本当は日本的なもの『和』なのではないか。『和』とは実は先進的でクリエイティブなものであり、建築もそうだというお話でした。漠然的に先入観で『和風』を感じていた横内先生の作品が魅力的で素晴しく、懐の大きさに圧倒されました。最終日、今回学生コンクールで入賞に選ばれた学生を前に、ご自身も卒業設計のために1年留年され満を持して臨んだ卒業設計が次点で悔しい思いをされたことを引き合いに出され、学生に『頑張りなさい』と激励されていたのがとても印象的でした。

横内先生こそ温和、柔軟、穏やかで懐の深いまさに『和』の人でありました。



建築祭・ギャラリーツアー 報告

広瀬 賢

ギャラリーツアーは今年の建築祭から始まった新しい試みです。建築祭をより開かれた催し物としていくために、高校生や一般の人に建築とはどんなことを考えて作られていくのかを「卒業設計コンクール」の出展作品を題材に紹介していくツアーです。

松本市内の高校を主として参加者を募集していましたが、今回の参加者は高専の学生2名、大学生3名、一般1名の6名でした。3班に分かれ、コンクールの主に大学生の作品を、時に制作者本人の話も聞きながら、参加者に解説していました。参加者は皆とても興味深く説明に聞き入り、「敷地はどうやって選んでいるのか」など、質問を投げかけることもありました。

ツアー後、参加者に感想をお聞きしました。一般の方からの「建築設計についてはこれまでなにも知らず新しい発見だった」や、高専の学生からは「自分が卒業するときには卒業設計コンクールに参加したい」との感想をお聞きし、今後に続く手応えを感じました。



III 第22回長野県学生卒業設計コンクール 報告

小川原吉宏

本年度建築祭は2月23・24日に松本市美術館で開催され、学生卒業設計コンクールは24日2階市民ギャラリーで行われました。

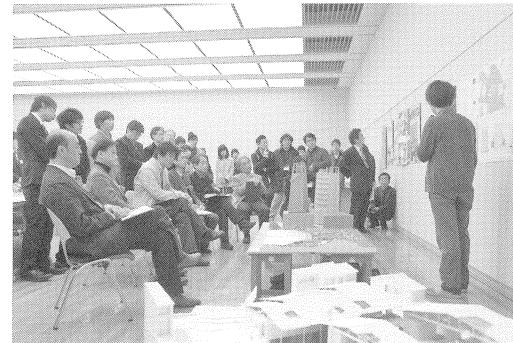
今年度から尾日向事業委員長となり会場・構成等は、昨年と大きな変更はないものの、新しい企画として一般の方々や建築に興味のある学生を対象に、卒業設計の作品をJIA会員がレクチャーする卒業設計コンクールギャラリーツアーが並行して開催されました。

本年度コンクール参加者数は、高校の部13名、専門学校の部16名、大学の部6名となり、昨年度より専門学校の部が10名多い参加でした。前回まで同時開催していた会員作品展が建築祭と分離したところを埋めた形となり、賑わいのある展示となりました。

私の担当は、会場配置構成・表彰状作成・段取り等で、図面読み込み時の審査員の方々と学生の対話を観られませんでしたが、作品に対して審査員の建築家としての個性・立脚点・思想、考え方垣間見える、緊張感のある公開審査会となりました。

本年度は前回に比べ、全体に完成度が高く見えたえのある作品が多く、学生を指導する先生方の意気込みまで伝わる充実した内容と思いました。

遠方よりお越しいただいた横内先生、審査員の皆さま・学校担当先生方々・会員・賛助会員・事務局・参加ご協力頂きまして、本当に有難うございました。そして委員長、事業委員会員の皆さん、多少の反省はありますが大成功に終わり本当に良かったです。お疲れ様でした。



III 第22回長野県学生卒業設計コンクール審査講評 報告

勝山 敏雄

今回の学生卒業設計コンクールは横内敏人氏を審査委員長にお迎えし、高校生、専門学校生、大学生の作品を一日かけて審査しました。以下横内氏の全体講評をまとめました。

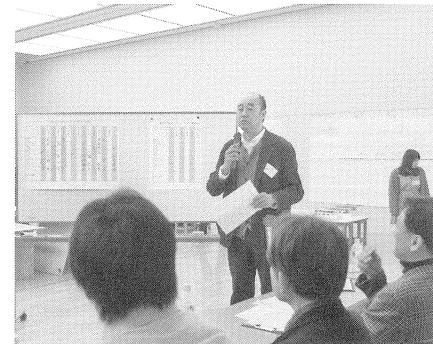
私は京都の大学に勤めています。京都には多くの学校がありますので、色々な学生の作品をよく目にします。私の大学で高校生コンテストというのを行っていて、同じような審査をしています。今回、この学生コンクールで感じたことは、どれもレベルが非常に高く感心しました。特に高校生の作品はレベルが高く、大学生と比べても同じレベルに達している作品が多くありました。地元の街のことや自ら問題点を探してテーマにしている点などが非常に評価できた。

卒業制作は決してそれが最後の目標ではなくむしろそれが出発点で、賞を取れた人はどこへ出しても負けないと、自信を持って良いと思います。惜しくも賞を取れなかった人も決して落胆をしないでもらいたい。実は僕も賞をとっていません。大学4年の時、卒業制作にトライしたのですが自分の考えがまとまらず、提出できませんでした。留年して一年間かけて自信作の卒業制作を提出して、賞を狙ったのですが、結局取れませんでした。

ただ、いま評価されていなくても時代が変わりますから、僕ら審査する側が気付いてないかもしれないということがあります。私の師匠の前川國男も東大を一番で卒業をしません。彼は当時、ボザールが主流の時代にコルビジェと同じような近代建築の放送局を卒業制作で提出し、評価されず、落第スレスレで卒業をしました。吉村順三も同じです。彼は芸大でしたが、近代建築の集合住宅を卒業制作でやって誰からも評価されなかった。今回評価されなくても、ポジティブに捉えて決して落胆せずに、少しだけ反省して色々なことに勉強を続けていってもらいたいと思います。

僕は今年で58才になりますが、この年になってやっと学生時代にやり

たかったことができるようになってきました。今描いている住宅のプランはほとんど学生時代にやっています。キャリアがついたのでそれが実現できるようになっただけです。ですから君たちのアイデアはほとんどが学生時代に生まれると言っても過言でもない。これから、学び続けていく君たちですから是非そのことを忘れずに、自分が、自分の中に芽を育てていくという心がけで、有意義な学生生活を送ってもらいたい。これから社会にでる人は社会の中で今まで学んだことを精一杯活かしていってもらいたいと思います。



第22回 学生卒業設計コンクール



信州大学工学部
建築学科4年
寺内研究室

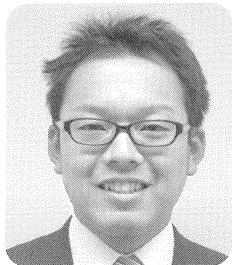
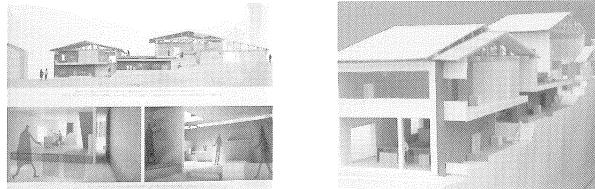
野原 麻由

この度は、金賞という大変名誉な賞をいただきまして誠にありがとうございます。素直にとてもありがとうございました。

今回の設計では、長野県木曽郡木祖村を対象に、旧宿場町における並び家を調査し特徴を調べ、空き家の状態と重ね合わせながら、大小全部で3つの提案をしました。調査には、旧中山道沿いの空き家調査に加え、全9軒の建物調査(平面図・断面図・ヒヤリング・写真撮影)を行いました。

私は岐阜市内の一戸建で育ったのですが、並び家は自分の育った環境とは全く違いました。旧宿場町という歴史をもち、建物は現代のものへと置き換わっていても敷地割りや屋並みが色濃く残っていて、高低差を利用した増改築がなされており、とても興味深かったです。調査を重ねるうちに、だんだんと村の方と親密になっていき、とても温かく迎えてくださいました。卒論・卒制に対して不安や焦りを感じる毎日のなかで、調査に行くことがまるで実家に帰るかのように、私にとっての癒しでした。

卒業設計に取り組むにあたってたくさんのご支援ご協力をいただいた木祖村のみなさん、ご指導いただいた先生方、先輩、友達、後輩達に心から感謝しております。ありがとうございました。



上田情報ビジネス専門学校

高野 修矢

今回、私のようなものに金賞という一番名誉のある賞を頂き本当にありがとうございます。

私が何かで賞を取るのは小学生ぶりでした。久しく忘れていた賞を取るという感覚はとても気持ちのいいもので、一生忘れることはないと思います。

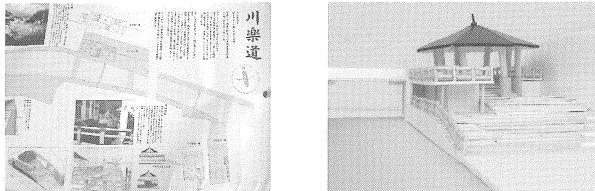
卒業設計を川の道にした理由は私は上田で一人暮らしをしていて、よく散歩をしていました。

そのときに良く川が目に付き、その川をたどって行くとすばらしい散歩道があり、それを見つけてから、こういった川の横をはしる散歩道がどの川にもあればいいと思うようになりました。

実際にどの川にも川の近くを歩ける散歩道があれば絶対に楽しいと思います。

川をテーマにしたこの作品は形にしていくのがとても難しく決して一人では作れるような作品ではなかったと思います。指導していただいた先生とアドバイスをくれた友達には感謝の言葉がつきません。

誰でも、金賞を取る可能性は秘めていると思うので、これからコンクールに参加する人は手を抜かず全力をつくしてください。



第22回学生卒業設計コンクール 審査結果

高校の部

金賞	山本 真那	長野工業高等学校	公園がつなぐもの
銀賞	芦澤 聰実	長野工業高等学校	緑に囲まれた憩いの場
銅賞	野竹 紗英	飯田長姫高等学校	ふるさと再生発信施設「おいでなんしょ天竜村」～伊那谷の原風景の再現と農山村生活の発信～
奨励賞	西澤 萌夏	長野工業高等学校	泊まる劇場
奨励賞	村松 健太郎	長野工業高等学校	動物子どもお年寄り園

専門学校の部

金賞	高野 修矢	上田情報ビジネス専門学校	川樂道
銀賞	高橋 幸子	上田情報ビジネス専門学校	つながりの街
銅賞	池田 遼	上田情報ビジネス専門学校	Tamariba
奨励賞	小池 剛史	上田情報ビジネス専門学校	growth & activity -若者育成空間-

大学の部

金賞	野原 麻由	信州大学	並び家を抜けて 一旧街道・宿場町における並び家のコンバージョン
銀賞	今城 絵美子	信州大学	刑務所のあるまち
銅賞	千福地 航平	信州大学	マザリアウ小学校
奨励賞	高橋 拓生	信州大学	変わりゆく伝統、紡いでゆく人と街

審査員 横内 敏人(審査員長) 上浪 寛
長田 孝三 水上 勝之 小松 康之
荒井 洋 場々 洋介

賛助会だより

生活空間から都市空間まで、時代に応え、未来を拓くYKK AP。

YKK AP(株)信越統括支店 長野ビル建材支店 営業部 営業部長 栗原 聰

YKK AP(株)は、快適な住空間を創造する「窓やドア」、美しい都市景観を創造する「ビルのファサード」など、さまざまな建築用プロダクトを通して、これから時代にふさわしい事業価値を創造し、暮らしと都市空間に、先進の快適性をお届けする企業を目指しています。また「新たな価値を

創造する技術の会社」として、商品の品質と安全性を第一に考え、お客様に満足し信頼していただける商品、環境課題を克服できる商品をテーマにさまざまな商品開発にチャレンジしています。

〒380-8561 長野県長野市アーツ6-11 TEL:026-267-7700

快適=省エネ=エコを実現 ドイツ木製サッシは人と自然に優しい

有限会社 アルベロ 丸山 雅秋

弊社(有)アルベロは、ドイツ高性能木製サッシ【Uw=1.3~0.78W/m²K Ug=1.1~0.5W/m²K】をヨーロッパのメーカーから直接お届けしております。窓は、家の中で約50%の熱エネルギーが出入りし、明るい住空間を作る大切な働きをしています。

性に優れた木製サッシ【木の伝導率は、アルミの1500分の1】は、快適さを損なうことなく、明るく開放的な住空間を可能にします。また、足元が寒いのは窓からの寒い冷気(コールド・ドロフト)によるところが大きな原因です。ドイツ木製サッシは床暖房がなくても足元の温かい家を作ることが可能です。

ドイツ木製サッシを使う事で、軽体としての家の性能を高めより少ないエネルギーで、省エネと快適性を同時に獲得することができます。パッシブハウスは、Uw 0.8W/m²K以上の窓を使用することで達成されました。断熱

ドイツ木製サッシは、私たちが、15年間使用した経験から自信を持ってお勧めいたします。

〒399-8205 長野県安曇野市豊科4770 TEL・FAX:0263-72-4799

木に親しみ、木に学び、木を使い、そして木を植えて森を守ります

株式会社 勝野木材 代表取締役 勝野 智明

弊社はグループ会社(有)ヤマカ木材と組み「立木伐採」「搬出」から「製材」「乾燥」「仕上加工」まで社内の一貫生産体制をとっています。中間コストを削減、さらにお客様と直接お取引することによってコストダウンを可能とし、最高級材である木曽檜を一般住宅へふんだんに使用し、住宅の価値を高めることを実現しています。当社より木曽檜材を提供させていただいている工務店、建設会社では、檜の4寸角柱を基本に、床組み、天井裏

など目には見えませんが、家の基礎となる大切な部分へも木曽檜を使用しています。

製材は木取りの無駄の出ないコンピューター制御による製材を行い、端材は床板・壁板に加工、樹皮はすべて牧畜用に使用し出来た堆肥は大地に返すなど循環型木材利用をすすめています。

〒399-5301 長野県木曽郡南木曽町読書1750番地 TEL:0264-57-2532 FAX:0264-57-3749

会員受賞
NEWS

受賞おめでとうございます

2012年度日本建築家協会優秀建築100選

「らせんの家」 林 隆

2012年松本市景観賞

最優秀賞

「うちにわ そとにわ」
吉田 満

景観賞

「萩原邸」
荒井 洋
「内川邸」
川上 恵一

第11回長野県建築文化賞

一般部門

住宅部門

優秀賞

「高原医院」
荒井 洋

最優秀賞

「屋根の家」
山田健一郎

優秀賞

「結ぶ小さなコートハウス」
林 隆

奨励賞

「歯科手塚医院」
轟 真也

奨励賞

「小林邸改修工事」
倉橋英太郎

奨励賞

「安曇野の平屋の家」
尾日向辰文

■開催したイベント

2月10日(日)…くらしの空間セミナー

2月23日(土)…建築祭(文化講演会)

2月24日(日)…建築祭(長野県学生卒業設計コンクール)

■今後の行事予定

4月9日(火)…幹事会

4月20日(土)…2013年度JIA長野県クラブ通常総会

編集後記

皆様からの投稿をお待ちしております。誌面へのご意見もお寄せ下さい。

編集人／下崎明久 発行所／JIA長野県クラブ 長野市南長野妻科426-1 長野県建築士会館内 TEL:026-232-3897 FAX:026-232-5303

発行人／川上恵一

URL <http://www4.ocn.ne.jp/~jia-naga/> E-mail jia-naga@jeans.ocn.ne.jp